



野田秀樹

NODA HIDEKI

“演劇は豊かでいいものだ”

改めて感じる事ができた”

撮影：筒井翼

SPECIAL INTERVIEW

東京芸術劇場開館35周年、芸術監督ラストイヤーを迎えて

9月のリオープンに向けて設備更新工事が進む東京芸術劇場は、オープンから35周年という記念イヤー。と同時に、2009年に初代芸術監督に就任した野田秀樹氏の最後の任期の年度となる。この劇場について、芸術監督という立場について、改めて振り返ってもらい、未来についても語ってもらった。

芸術監督というオファーをもらった時、実は、この仕事は自分に向いているのか、かなり考えたんです。実際に向いていたかどうかは別にして、芸術監督になったことで、それまで観ていなかったところに目がいくようになりました。具体的に言うと、いろんな人の作品を幅広く観るようになった。そして、たとえ自分の趣味とは違っても、素晴らしい作品はたくさんある、やはり演劇は豊かでいいものだ”と改めて感じる事ができました。

また、観るだけではなく、多摩美術大学で教えたり、芸劇で東京演劇道場（野田氏の発案により2018年に始まった「芝居人」の会）の会合で「道場」を始めたことで、多くの若い人と一緒に創作するようになり、自分の考えをより明確に言語化する必要が出てきました。演出家の要求に必ずしも誰もが最初からできるわけではないので、その時に「こうできるようにしてほしい」という方向性を出す。同時に私の表現とは違うや

り方、考え方に接して、それはそれで決して悪いことではないので、どういう選択がよいのかを言葉にする習慣がついた。これは、自分の演劇観にも非常に大きく影響しましたし、創作にもプラスになりました。

就任時に「多くの人が集まる賑わいをつくりたい」「才能ある若い人たちに使ってもらえる劇場にしたい」「国際的な作品を上演し、世界には素晴らしい作品があると伝えたい」などの目標を立てましたが、ある程度は達成できたと思っています。心残りなのは、2020年からコロナがあり、地方の劇団との連携が思うようにはできなかったこと。そして現在も続いている工事が約10カ月あって、最後の年に向けてやりたかったことが少し尻すばみになったことですね。

ただ、コロナがあったことで良い方向に気持ちが変わったこともあり。舞台芸術が不要不急と呼ばれて、ステイホームとなった時、テレビの前で毎日ブツブツ文句を言っていたん

ですが、ふと、これじゃいけない、自分は行動して生きてきたはずだと思い立ったんです。そこでプロデューサーを中心に演劇界のいろいろな人に話を聞いたら、みんな同じように困っている。それで緊急事態舞台芸術ネットワーク（現・日本舞台芸術ネットワーク）という組織をスタートさせたんですが、これも芸術監督をやっていたから実現できたのかもしれない。

芸劇の歴史35年のうち、私は2009年からの17年しか知りませんが、運よく初代の芸術監督をさせてもらったので、何もない更地のところから自分のやりたいことを形にしてこられました。その点にはとても感謝をしています。大きさにしても立地の良さにしても、とても恵まれた劇場ですから、これからずっと賑わってほしい。舞台芸術部門での次期芸術監督の岡田利規さんと私とでは、演劇の種類がかなり違うので、その変化がさらに芸劇に広がりを生み、おもしろい劇場になっていくのではないでしょう。

聞き手・構成：徳永京子（演劇ジャーナリスト）



芸劇大公開！オープンデー

One Day Open Event

東京芸術劇場のリオープンを祝して、オープンデーを開催！

設備の更新工事で休館中の東京芸術劇場が、いよいよ今秋リオープン。再開を祝して、9月6日（土）に「オープンデー」を開催。4つのホールをはじめ、展示室など劇場全体を使用した無料のイベントを楽しめる。コンサートホールでは、オルガンコンサートや室内楽演奏、プレイハウスやシアターイーストでは身体を動かすワーク

ショップ、ギャラリーでは貴重なポスター展示など、イベントがもりだくさん！劇場ツアーに参加して、日頃入れない舞台の裏側を覗くこともできる。館内に設置されるスタンプラリー形式のクイズを楽しみながら、芸劇を探検してほしい。そのほかにも、アトリウムでのファンファーレ、劇場前広場での大道芸なども開催さ



芸劇大公開！オープンデー

9月6日④ 11:00～17:00

東京芸術劇場館内、劇場前広場

【入場無料】 プログラム詳細は8月中旬に発表予定

れ、子どもから大人まで、劇場に初めて来る人も誰でも楽しめるお祭りの一日。この機会に普段足を踏み入れたことがないホールにも入ってみるなど、芸劇の隅々まで遊び尽くそう！詳細は決まり次第WEBサイトにて発表！



【サラダ音楽祭】メインプログラム

子どものためのオペラ『しろくまの王さま ヴアレモンの物語』（日本初演・日本語上演）

Die Geschichte von Valemon, dem Eisbärkönig

愛する王子を救え！勇敢な少女の冒険オペラ

サラダ音楽祭では毎年、子どもたちが舞台芸術を楽しく体験できる機会を提供してくれる。今年は『しろくまの王さま ヴアレモンの物語』を上演。2020年にルクセンブルクで初演された子どものためのオペラの日本初演だ。

演出の菅尾友はドイツのコトブス州立劇場の首席演出家およびオペラ部門監督代理を務める。地域とのつながりを重視するドイツの公共劇場では、子ども向けの活動は重要なポジションを担っているという。彼自身、多くの作品を手がけてきた。その経験から、どんな作品を、どう見せれば子どもたちに“刺さる”のかを熟知しているのだろう。これまでのサラダ音楽祭の演目でも、子どもたちが歓声をあげ、前のめりになって、食い入るように舞台に集中しているのがわかる。

もちろん日本語での上演。その翻訳を演出の菅尾が自ら手がけていることで、芝居のテイストに、よりふさわしい言葉としてフィットしていると思う。

しろくまヴァレモンは人間の娘ラグナと結婚する。聡明なラグナはヴァレモンの心のやさしさを知っていて、彼を受け入れたのだ。じつはヴァレモンは人間の王子で、邪悪なトロールの女王の魔法でしろくまの姿に変えられていた。その秘密をラグナに知られてしまった彼はト

ロールの城に連れ去られる。勇敢なラグナはヴァレモンを救うために冒険の旅に出る。

という、「美女と野獣」+「ドラクエ」みたいな物語！

登場人物はラグナ（ソプラノ・種谷典子）とヴァレモン（バリトン・小野寺光）。そしてストーリーテラー（ソプラノ・神原愛可）が、物語の進行役であるとともに、ラグナの両親からトロールまでいくつもの役を演じ分ける。

作曲はウズベキスタン出身のオーストラリア

の女性作曲家エレナ・カツツ＝チェルニン。師のヘルムート・ラッペンマンのポスト前衛の姿勢をさらに徹底したような、「難解」とは無縁の現代サウンドに、台詞も多用されて、ミュージカルのように親しみやすい音楽劇になっている。

子ども向けの作品といっても“子ども専用”ではないし、ましてや“子どもだまし”ではまったくない。大人が観ても心から楽しめるエンタテインメント。親子そろって出かけた。

文：宮本明（音楽ライター）

TOKYO MET SaLaD MUSIC FESTIVAL 2025 [サラダ音楽祭] メインプログラム

子どものためのオペラ『しろくまの王さま ヴアレモンの物語』（日本初演・日本語上演）

9月14日④・15日④⑥ 各日14:00開演
シアターイースト

演出・台本日本語翻訳：菅尾友
出演：ラグナ／種谷典子
ヴァレモン／小野寺光
ストーリーテラー／神原愛可

ヴァイオリン／福岡雄也
クラリネット／濱崎由紀
トロンボーン／東川暁洋
ハーブ／宮本あゆみ
打楽器／永野雅晴



【サラダ音楽祭】

